

英国における外国語としてのフランス語教育

中村 典子

はじめに

1. 英国の教育制度と外国語教育
 2. イングランドにおけるフランス語教育の現在
- まとめ

はじめに

英国の第75代首相デイヴィッド・キャメロン (David CAMERON) が2013年1月23日、ロンドンで行った演説の中で提案し、2016年6月23日に実施されたBrexit (イギリスのEU離脱) を問う国民投票 (United Kingdom European Union membership referendum) の結果は、提案者キャメロン首相にとって意外な結果となった。「国民投票にてBrexitの是非を問う」という戦略を通じて、英国国民の不满を吸収し、政治基盤の強化を目指していたキャメロン首相自身はEU残留を望んでいたからである。キャメロン首相の目論見は外れ、同年7月13日に首相を退任した。第76代首相となったテリーザ・メイ (Theresa MAY) はBrexitをまとめることができず、2019年5月に辞任を表明した。その後、Brexitを推進してきたボリス・ジョンソン (Boris JOHNSON) が同年7月24日、満を持して第77代首相となり、ようやく2020年12月31日に「移行期間」が終了し、Brexitが完了した。それに伴い、EU加盟国間の学生流動を高めるエラスムス計画 (The European Community Action Scheme for the Mobility of University Students: ERASMUS) からも離脱¹した。英国の外国語教育は今後、どう変わっていくのであろうか。

まず、明らかにしておきたいが、英国において従来からも現在も、外国語として最も広く教えられているのはフランス語である²。本稿では、まず英国における教育制度をフランスの教育制度と比較しながら、学校制度の中での外国語教育について説明する。そして、イン

*本研究はJSPS科研費 19K00813の助成を受けたものです。

1 ジョンソン首相の案によれば、EUのエラスムス計画離脱後は、チューリング計画 (英国の数学者のAlan TURINGに因んだ名称) にて、行先をヨーロッパの大学に限定しない英国独自の留学・移動就業計画を2021年9月から実施するという。《Boris Johnson: Turing scheme to replace Erasmus will give students pick of the world》in *The Sunday Times*, December 31, 2020.

〈<https://www.thetimes.co.uk/article/boris-johnson-turing-scheme-to-replace-erasmus-will-give-students-pick-of-the-world-gsnkxf0sf>〉

2 *La langue française dans le monde*, édition 2019, Gallimard, p.231.

ランドにおいて現在のフランス語教育が抱えている問題をGCSE（前期中等教育証書）とGCE A-Level（中等教育証書上級）との関係から説明しておきたい。

1. 英国の教育制度と外国語教育

英国における義務教育期間は、5歳から16歳までの11年間である（ただし、イングランドの「離学年齢」は18歳）。フランスにおける義務教育期間は、以前は6歳～16歳までの10年間であったが、2019年9月から義務教育の開始年齢が3歳となったため、義務教育期間は13年間となった。以下にフランスと英国の学校制度の対比表を作成した。

フランス		年 齢	英 国		
	Petite section	3歳- 4歳	Preschool	Foundation Stage	Nursery School
Maternelle	Moyenne section	4歳- 5歳			
	Grande section	5歳- 6歳	Year 1	Key Stage 1	Primary Education
	CP	6歳- 7歳	Year 2		
	CE1	7歳- 8歳	Year 3	Key Stage 2	
Primaire	CE2	8歳- 9歳	Year 4		
	CM1	9歳-10歳	Year 5		
	CM2	10歳-11歳	Year 6		
	6ème	11歳-12歳	Year 7	Key Stage 3	Secondary Education
Collège	5ème	12歳-13歳	Year 8		
	<i>DNB</i>	4ème	13歳-14歳		
	3ème	14歳-15歳	Year 10	Key Stage 4	
	2nde	15歳-16歳	Year 11		
Lycée	1ère	16歳-17歳	Year 12	Sixth Form etc.	
<i>Baccalauréat</i>	Terminale	17歳-18歳	Year 13	<i>GCE A-Level</i>	
Études supérieures			Higher education		

(Le système scolaire au Royaume-UniのWebサイト³をもとに筆者が作成)

英国では、16歳の時点で、義務教育終了のKey Stage4に到達するのが標準で、GCSE (General Certificate of Secondary Education：前期中等教育証書) を全ての生徒たちが受験する。これはフランスの前期中等教育のcollège終了時に受けることができる国家資格証書DNB (Diplôme national du brevet) に相当すると言えよう。だが、フランスのDNBが5科目

3 Le système scolaire au Royaume-Uni.

(<https://devenirbilingue.com/expatriation/scolarité-a-l-etranger/systeme-scolaire-angleterre/>) (最終アクセス：2021年1月20日)

(フランス語、数学、地理歴史、外国語、口頭面接など)で総合点数により成績・合否が決められるのに対して、英国のGCSEの試験は外部機関が実施しており、生徒は自分の進路や興味をもとに、15~40の科目の中から9~12の科目を受けることが推奨されている⁴。科目ごとに受験し、以前はA+からGまでの8段階で教科ごとに成績がつけられていたが、2017年以降は1~9の9段階評価となった。GCSEもDNBもともに、義務教育終了時点において、十分な学力を獲得しているかどうかを示す証書として機能している。

英国で大学進学を希望する生徒(高校生)は、GCSE取得後、2年かけてGCE A-Level(中等教育証書上級)を取得することを目指すことになる。その際、進学を希望する大学の学部が課す科目3~4科目においてA-Level(Advanced Level)の資格を取得することが要求される。この試験もGCSE同様、外部機関であるAQA、Edexcel、OCRといったExamination board(試験委員会)が作成していて、どの試験委員会の試験を採用するかは、高校、あるいは当該科目の担当教員に任されているようだ。こうした試験委員会は、同時に試験対策のための参考書や問題集を一般に販売している。

英国は、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドからなり、教育制度もそれぞれ微妙に異なっている。各地域の外国語教育がどうなっているのかを説明しておきたい。イングランドでは、7歳から14歳までの生徒は1つの外国語が必修科目となる。スコットランドにおいては、5歳から第1外国語を学び、9歳から第2外国語を学び、2つの外国語が15歳まで必修科目となる。その後は選択科目となるようだ。ウェールズと北アイルランドでは、11歳から14歳まで1つの外国語が必修科目である。

Eurostat(2016)の統計によれば、英国においては、外国語としてフランス語を学んでいる生徒が最も多く、小学校の70%以上がフランス語の授業を提供し、英国全体で約40万人が学校でフランス語を学習している⁵らしい。英国の生徒が外国語を選択する際、まずは隣国でもあり、1066年のノルマンディー公ウィリアムのイングランド征服(The Norman Conquest of England)以後、約300年間、英国の貴族階級の公用語がフランス語となったこと、その結果、フランス語の語彙が多く英語に入ったため、英語の語彙の約70%がフランス語と共通であると言われることにも関係しているかもしれない。

2. イングランドにおけるフランス語教育の現在

イングランドでは、7歳から14歳まで外国語が必修科目であり、その後は、少なくとも選択科目として14歳から16歳まで外国語の授業を受けることができる。そして、GCSEやA-Levelの受験に臨む。外国語科目の受験者数の内訳⁶を見てみよう。GCSEにおいてフラン

4 *Id.*

5 *La langue française dans le monde*, édition 2019, Gallimard, p.231.

6 *Id.*

ス語を選択した生徒数は、2014年の160,955名に対して、2016年は136,862名と受験者が約15%減少している。とはいえ、2016年の数字でドイツ語受験者が48,136名、スペイン語受験者が87,519名であるので、フランス語の受験者数が最も多いことに変わりはない。しかし、A-Levelでは、2016年にフランス語で受験した生徒の数は8,500名であるのに対して、1996年の受験者数は22,700名であった。つまり、20年間で半数以下になっている。他方、スペイン語の受験者数は1996年の4,100名から2016年の7,500名とほぼ倍増している。時代とともに外国語の選択にも変化があって当然であるが、英国の場合は、資格試験の難易度なども関連しているらしい。「(…) バカロレアに匹敵するA-Levelの試験においては、外国語科目の受験は必修ではない。それゆえ、一般に3~4科目を受験するA-Levelにおいて、フランス語は難しいと思われるがちで、A-Levelでは必ずしも選択されていない。」⁷

英国のサウサンプトン大学 (University of Southampton) のMichael KELLYは、英国の外国語教育について2003年にこう書いている。「だが、外国語教育が14歳以降、選択制に代わってしまったことは、外国語教育の効果を著しく弱める危険性がある。」⁸

KELLYは、外国語学習における継続の重要性を訴えている。受験科目の勉強のために、外国語学習を中断してしまうことは、それまでに獲得した外国語の運用能力をかなりの部分で失うことになりかねない。ただ、まだBrexitの前であれば、英国の中学生は、夏休みにフランスの中学生との交換制度により互いの家庭に滞在できていた。また、ERASMUS計画により、EU諸国への留学が可能であった。そうしたことが簡単になくなった2021年、英国の外国語教育はどこへ向かうのであろうか。

ところで、筆者は、英語母語話者の学生とフランス語学習について話す機会を得た。英語母語話者のメリットでもあり、デメリットでもある点について、ブリストルでインタビューした学生の回答を通して感じたことを最後に記しておきたい。2019年7月にブリストル大学で開催されたAFLS (Association for French Language Studies) の学会に参加した際、フランス語が堪能なイギリス人学生のMarc君は、筆者にこう語った。

「私はフランスで働きたいので、フランス語をもっと学びたいが、GSCE以後、外国語を学習しない友人の気持ちもわからないでもない。なぜなら、世界中の人が英語を話すようになってきているので、取って他の言語を学ぶ必要があるのか、と思う人がいても不思議ではないからだ」

多くの、英語母語話者にとっては、そうした視点が普通なのかもしれない。ただ、KELLYが強調している2つの見解をここで引用しておきたい。

7 « (...) aucune langue n'est obligatoire au A-Level (équivalent du baccalauréat). Ainsi, les élèves présentent généralement entre 3 et 4 matières à cet examen et le français, pour lequel l'examen est jugé difficile, n'est pas forcément privilégié. » *Ibid.*, p.231.

8 « Mais l'enseignement des langues vient d'être rendu optionnel dans les écoles au-delà de l'âge de quatorze ans, au risque de rendre celui-ci largement inopérant. », Michael Kelly, « Vers un renouveau de l'enseignement des langues au Royaume-Uni ? », *Revue internationale d'éducation de Sèvres*, 2003.

« Tout d'abord, l'anglais ne suffit pas : les Britanniques ont la chance de parler une langue internationale, mais un monolinguisme anglophone laisserait le Royaume-Uni vulnérable, et dépendant de la bonne volonté et des compétences linguistiques d'autrui. »⁹

「まず、英語だけでは十分ではない。英国人は幸いにも国際共通語を話しているが、英国の単一言語主義は英国を脆弱にしてしまう。なぜなら、他者の善意と言語運用能力に依存することになるからである」

« Les jeunes Britanniques manquent de compétences linguistiques suffisantes et sont désavantagés en ce qui concerne l'embauche et la mobilité, face aux concurrents d'autres pays qui font souvent preuve d'une bonne maîtrise de l'anglais en plus de leur langue maternelle. »¹⁰

「若い英国人は、十分な言語運用能力がないため、就職と流動性に関して不利な状況にある。なぜなら、自分の母語以外に英語を十分にマスターしていることを示す他国の競争相手の前で太刀打ちできないからだ」

結語にかえて

本稿では、英国の教育制度とフランス語の教育制度を比較しつつ、英国の外国語教育の制度を概観した。そして、イングランドにおけるフランス語教育の現在についても記述した。今回、具体的な教材分析、GSCEやA-Levelの試験内容の検討ができなかったので、次回の課題としたい。

BrexitとCOVID-19の影響により、英国の外国語教育がどのように変化するのは、数年後でないと判断できないが、教育制度や試験制度、また、ジョンソン首相の提唱するTuring schemeがどのような形で実現するのか注視していきたい。

〈主要参考文献〉

- *La langue française dans le monde*, édition 2019, Gallimard,
〈<https://www.auf.org/nouvelles/actualites/langue-francaise-monde-2019-ligne-version-integrale/>〉 (最終アクセス：2021年1月20日)
- *Le système scolaire au Royaume-Uni*,
〈<https://devenirbilingue.com/expatriation/scolarité-a-l-etranger/systeme-scolaire-angleterre/>〉 (最終アクセス：2021年1月20日)
- Michael Kelly, « Vers un renouveau de l'enseignement des langues au Royaume-Uni ? », *Revue*

9 *Id.*

10 *Id.*

internationale d'éducation de Sèvres [En ligne], 33 | septembre 2003, mis en ligne le 23 novembre 2011,

〈<http://journals.openedition.org/ries/1705> ; DOI: <https://doi.org/10.4000/ries.1705>〉 (最終アクセス: 2021年1月20日)

-日英教育学会編 『英国の教育』, 東信堂, 2017年.

* 英国の教育制度とフランス語教育に関しては、甲南大学国際言語文化センター英語特任講師のTomas Stringer先生、ブリストル大学卒業生のMarc Barnard君にインタビューをすることができ、フランス語教育の実際を知ることができた。心より感謝申し上げます。

Thanks to Mr Thomas Stringer, a fixed-term lecturer at Konan University, and to Mr Marc Barnard, a former undergraduate student at Bristol University (a graduate student at UCL in 2019), I was able to better understand the pedagogical realities of how French is taught as a foreign language in the UK. I would like to thank them both from the bottom of my heart.

〈キーワード〉 外国語としてのフランス語 / 英国 / GCSE (前期中等教育証書) / GCE A-Level (中等教育証書上級)

〈Mots-clefs〉 français langue étrangère / Royaume-Uni / GCSE / GCE A-Level

〈résumé〉

L'enseignement du français langue étrangère au Royaume-Uni

Noriko NAKAMURA

Dans le pays de la langue de Shakespeare, le français reste, depuis longtemps et encore aujourd'hui, la première langue étrangère enseignée dans les établissements scolaires. Dans cet article, nous voudrions tout d'abord esquisser la situation actuelle de l'enseignement des langues étrangères au Royaume-Uni, et préciser ensuite certains problèmes qu'engendre le système actuel de l'enseignement du français en Angleterre par rapport aux diplômes: le « GCSE », équivalent du diplôme national du brevet français et le « GCE A-Level », équivalent du baccalauréat français. Enfin, nous aurions aimé analyser quelques manuels ainsi que des contenus des deux sortes examens en question, mais ce sera l'objet de notre prochaine étude.